

## 子供への歌唱指導に対する提言

松 浦 良 治

### I 序

#### II 小学校における歌唱指導について

提言1 <「楽しく歌う」という目標を更に発展させ「美しさを意識した歌唱表現」を目指すべきである>

提言2 <教師は自分の「目指す理想の声」を持つべきである>

提言3 <美しい響きで歌うための「頭声的発声法」について>

提言4 <変声期の歌唱指導には、個人差に応じた細かい配慮が必要である>

提言5 <ピアノの演奏に頼らず、時にはア・カペラ（無伴奏）で歌わせてみることも必要である>

#### III 中学校における歌唱指導について

提言6 <グループ学習をさせる場合は、練習に入る前に「練習すべき重要なポイント」を与え、生徒に確認させた上で、小さな音量で行なわせるべきである>

提言7 <教師は音楽的、技術的な「手本」を自ら子供の前で示し、進むべき方向を示してやらねばならない>

提言8 <生徒の歌唱力を越えた難曲を、課題曲として与えてはならない>

#### IV 校内合唱コンクールについて

#### V 結び

### I 序

現在、学校現場では歌う意欲はあっても「怒鳴り声」で歌う児童、生徒が多く、「歌う喜び」や「美しいハーモニー」を体験させることが非常に難しいのが現状のようである。

このことは教師の音楽教育への情熱だけでは解決出来ない問題であり、教師自身が持っている「美しい声」に対する理解と実践能力、適切な教材を使うための指導力など様々な要因が考えられる。

筆者は年に2回、春期秋期の教育実習期間に学生の教育実習出向指導で小中学校の音楽教育の現場を訪れている。実習生の研究授業の後、反省会で現場の先生方から生徒指導の実体について様々な角度からのお話を伺う機会があるが、やはり「歌唱指導の方法」について悩んでおられる先生方が多数見受けられた。

この論文では、上記に対する筆者の意見をいくつか実例をあげながら「歌唱指導に対する提言」としてまとめてみた。

これらの提言が実習を行なう学生や現場の先生方にとって指導法の指針の一助になればと思っている。

### II 小学校における歌唱指導について

#### 1 ある小学校の3年生のクラス授業風景

授業が始まるとすぐ実習生が「さあ、これから元氣良く歌いましょう．．．」と子供達に声をかけると皆一斉に大きな声で歌いながら教室の中を歩き始めた。子供達の表情は生き生きとして、皆歌っていることを心から楽しんでいる様子であった。しかし子供達の歌っている「声」はほとんど「怒鳴り声」に近く、部屋の中で聞いていた筆者にとって「不快」を通り越して「苦痛」に感じられ、「音楽の授業でこんな風に歌わせて良いはずはない。」と思わずにはいられなかった。子供達の様子を良く観察してみると、楽しそうではあるが何人かは力んで歌ってい

るためか表情が硬張り、首に青筋を立てて歌っている姿が見受けられた。その後、この日に予定されていた歌唱教材に入ると、子供達は更に元気良く歌い続けていたのである。

研究授業の後、反省会でこのクラスの担任教師は、音楽の時間は子供達がいつも楽しそうに、元気に歌を歌うことを誇らしげに語っていたのである。

この授業の「歌唱指導」について技術的側面（発声法等）から考察し、次のようにまとめた。

- ①「怒鳴り声」で歌っているため声の音色は子供によって様々となり、地声を絞り出すような「喉が詰まった響き」のため旋律を美しく歌うことができない。
- ②授業の後、男子の中に何人か話し声が「がらがら声」になっているのが聞こえてきた。この状態で歌い続ければ声帯に大きな負担がかかり、音声障害を起こす可能性が高い。
- ③このような発声法で高音域を歌った場合、声帯の負担は更に大きくなって「完全な音声障害」となるかまたは、音色が非常に硬い「不快な響き」となるかのどちらかであろう。
- ④このような「地声中心の発声法」では曲の旋律の美しさやハーモニーの美しさを味わう余地がなくなり、将来美しく響く「健全な声」を会得することが非常に難しくなる。

### ◎提言 1

＜「楽しく歌う」という目標を更に発展させ「美しさを意識した歌唱表現」を目指すべきである＞

教師自身が子供達に「地声」と「美しく響く声」の違いを例をあげて自らの「声」で示しその根本的な違いについて認識させることが大切である。例えば曲の情景を想像しながら「優しく歌ってみる」という方法で歌わせてみれば「地声」は一変して「美しい声」になるはずである。そして「優しい歌い方」はとても気持ちが良く、回りの友達の声と融合して「美しい旋律やハーモニーを味わうことが出来る」ということを子供達自身に気付かせることである。そのためには「地声」で歌った場合には直ぐに止めさせ、教師自身の目指す「声のイメージ」に近づくまで根気強く指導していく必要があるのではないだろうか？ しかしこの指導法での「美しい声」は「声の生命力」という点で地声に比べて「貧弱に聞こえる」という欠点を持っている。小中学校の歌唱表現における最大の課題は「美しい生命力溢れる声」の追求であり、「大きな声を出しても地声にならな

い工夫」が必要であると考えられる。

### ◎提言 2

＜教師は自分の「目指す理想の声」を持つべきである＞

音楽教育は目に見えない「音」を媒介としているのである。教師は「どういう声が良いのか」ということについて「美しさ」だけにこだわらず、発声法の技術的なことも含めた声楽に関する基礎知識や実践能力を勉強することが必要である。例えば範唱用CD、一流合唱団やソリストの演奏を聴いて「美しい声の響き」を感覚的に自身の中に取り込んでいくような方法も有効な手段であろう。こういう理想を持たずに歌唱指導を行なっても、子供達に「美しい音楽をする楽しさ」を体験させることは期待出来ないであろう。

### ◎提言 3

＜美しい響きで歌うための「頭声的発声法」について＞

発声指導については実に多くの文献があり、内容も多岐に渡っているが、筆者は大別して姿勢、呼吸法、共鳴の3つに分けられると考える。このことは筆者の日常の研究テーマでもあり、ここでは「共鳴」の部分に焦点を絞り考察していく。

次頁の図はドイツの音声学者フィスラー博士による6つのアンザッツタイプ（響きを当てる場所）である。

筆者は大学で19年間学生の発声指導に携わっているが、その経験から3 a 又は3 bに声が軽く当たるような感覚を持たせることにより、声が格段に明るく、柔らかく響くことが確認出来た。また「声の当たった場所で発音し、そこから声が飛び出していく」ような感覚を要求することにより、「明るく伸びやかな響き」と「歌うことの爽快さ」を同時に得られるということも確認出来たのである。高音域の発声法では4と5の部分に声を当てるように発声すると、より自然に声を響かせることが出来るのであるが、あくまで「当たるような感覚」であるため個人差があるので、指導の際はこのことを考慮しておく必要がある。指導に当たっては、図1、2に声を当てる地声の感覚ではなく、3 a、3 bに当てる「頭声的な感覚」を根気良く指導すべきである。このことにより喉が詰まった地声や息もれのするハスキーな声から、美しい響きを持った声へと移行していくはずである。

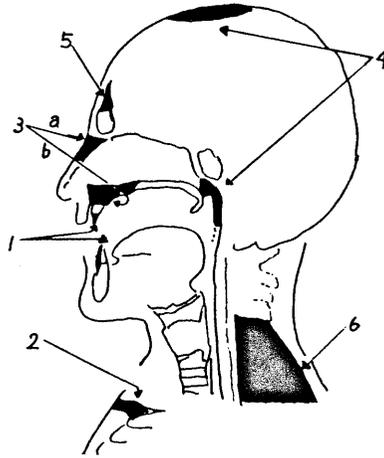


図1

また個人指導を行なう場合は、子供の音楽的資質や体調などに細心の注意を払い、音域や音量に関して無理な歌い方をさせないことである。人の発声する感覚には個人差があり、「声を当てる感覚」はほんの少しの違いで「攻撃的な発声法」になってしまう恐れがあるので、あくまでも「優しく歌わせる」ことを決して忘れてはならない。

## 2 ある小学校の6年生のクラス授業風景

授業が始まり、実習生がピアノで軽快な曲を弾き始めると、すぐに子供達は楽しそうに歌い出した。

しかし、大きな声で歌っているだけで音程がばらばらなため、歌っている曲が斉唱か合唱かを聞き取れないような状態であった。やがて実習生はこの日予定していた合唱曲の音取りを指示し、高声部、低声部をそれぞれ3回ほど繰り返し歌わせたが、やはり様々な音程が入り混じっているので「合唱のハーモニー」にならないのである。この間実習生の表情に明らかに「苛立ち」が見えたが、笑顔を作り、子供達の演奏を誉めたりしながら指導案に添って授業を進めるべく、形ばかりの作業を続けていたのである。最後に曲をまとめる段階になると子供達は単純作業の繰り返しに飽きてしまい、「歌う喜び」など感じなくなってしまうという様子であった。

### ◎提言4

＜変声期の歌唱指導には、個人差に応じた細かい配慮が必要である＞

このクラスの中には何人か変声期を迎えている子

供がいたと考えられる。彼らは声の出る音域が狭くなり、仲間と同じ音域を歌うことが苦痛に成っていたはずである。このような場合にはどうしても個人指導が必要になるが、子供の歌える音域を越えて無理な声を出させないよう、細心の気配りを持って指導に当たることが必要である。声帯の変化によって考えていた高音が出せない子供には、まず「精神的な安堵感を与えること」が必要であろう。また、低音部を歌うのが無理であれば、例えば主旋律を1オクターブ下げて歌わせてみるなど、様々な角度からアプローチが必要なのである。

### ◎提言5

＜ピアノの伴奏に頼らず、時にはア・カペラ（無伴奏）で歌わせてみることも必要である＞

前述の子供達のように、ただ大声で歌うだけではピアノの音や自分達の声を「聴く」という感覚が育たないのである。そこでピアノの音の頼らずに歌うことにより、自分達の歌声だけに集中させるのである。大声で歌っている自分達の演奏を聴くことが出来ないで、当然発声法にも変化が現れるはずである。また、自分達の歌声に神経を集中して聴くことにより、音程の狂いなどにも気付かせることが出来るであろう。

## III 中学校における歌唱指導について

### 1 ある中学校の1年生のクラス授業風景

実習生は発声練習を終えると、生徒にこの日に予

定していたある3部合唱の曲のパート練習を始めるよう指示した。音楽室に2つのパートが残り、1つのパートは廊下で練習を始めたが、全員が大声で歌っているのを回りは騒音状態となった。この騒音状態の中で実習生は各パートの間を回り、歌唱指導を行っていたのである。最後に全員を集めて3部合唱を試みたが、各パートで音が良く取れておらず、全く合唱のハーモニーにならないという状態であった。

### ◎提言6

＜グループ学習をさせる場合は、練習に入る前に「練習すべき重要なポイント」を与え、生徒に確認させた上で、小さな音量で行なわせるべきである＞

上記について重要と思われる事項を次の①～④で整理することにする。

- ①曲全体の中から特に音程の難しいところ、リズムの難しいところなどを示し、重点的に練習をした後に全体を通して歌ってみる。
- ②ひとつの教室の中で2つのグループが同時に練習をしなければならない時は、楽器の音は勿論のこと、声も小さな音量で練習する。
- ③教師がひとつのグループを指導する時は、他のグループはそれを聞くようにして、音に対して全員の聴覚を集中させる。その場合、ア・カペラで歌わせてみるのもひとつの方法である。
- ④最後の合唱に入る前に生徒への助言として、「旋律やハーモニーの美しさを味わいながら歌ってみる」、「お互いにパート同志聞き合いながら歌ってみる」、「歌詞の意味をイメージしながら歌ってみる」、など他にも考えられると思うが、大切なことは生徒に何らかの「目標」を与えてやることである。

## 2 ある中学校の2年生のクラス授業風景

この授業は「生徒の自主的な活動を尊重する」という学校のスローガンのもとに行なわれた授業である。授業開始とともに実習生は生徒にこの日の課題曲を示し、作業順序を説明した。まずパート別に別れて音取りをした後、集まって合唱をする。その後全員で意見を出し合って、演奏について改善すべきところを話し合い、それをもとに再びパート練習を行なった後、最後にまた全員で合唱を試みる。実習生は作業順序の説明を終えると教室の脇の方へ行き、生徒の様子を観察していたのであった。

1回目の合唱が終わったところでリーダーの生徒が意見を求めると、生徒の間から様々な改善点が提

案された。その後再びパート練習の後、最後の合唱が歌われたが、残念ながら改善点は演奏の結果としてはほとんど変わっていなかったのである。授業の最後に実習生が生徒の前に出てきて、この日の授業の成果について質問したところ、次のような答えが返ってきた。「最後の合唱は音楽的に大変良い演奏だったと思う。全員で意見を出し合った改善点が十分演奏に反映され、その効果を確認することが出来た。」しかし生徒達の演奏で音楽的に感じられるフレーズやハーモニーは全く聞こえてこなく、歌詞を音符に乗せて何となく声を出しているだけであった。

### ◎提言7

＜教師は音楽的、技術的な「手本」を自ら子供の前で示し、進むべき方向を示してやらねばならない＞

まず「子供達は自分がどういう声を出しているのかまったくわからない」と思うべきである。このことは大人にとっても同様であり、発声法を専門的に勉強した声楽家でさえ、「自分の声を客観的に聞く」ことは難しいのである。

次に教師が自ら手本を示すべき例をあげてみることにする。

- ①曲のイメージを表現するため、fやPで歌う声をもどのような発声法で歌い分けたら良いのか。
- ②高い音域はどのような発声法で歌えば美しく響く声になるのか。
- ③正確な音程で歌うにはどのような方法で発声すれば良いのか。

教師が子供達の前でこれらのことをひとつずつ示してやることにより、子供達の中に歌い込んでいく「目標」が出来るのである。この「目標」なしには何度歌っても、美しいハーモニーで歌う喜びを体験させることは出来ないであろう。

## 3 ある中学校3年生のクラス授業風景

この日は校内合唱コンクールに出場するための曲の最後の仕上げの段階ということで、実習生は発声練習もそこそこに早速曲の練習に取りかかった。このクラスは歌が好きな生徒が多く、歌唱力もあるようで3部合唱のかなり難しい曲が選ばれていた。生徒達は生き生きと目を輝かせてエネルギーを漲らせて歌い、この曲に全力を傾けて歌っているという様子であった。曲の最後のクライマックスのところで各パートが最高音を長く伸ばして劇的に曲が終わるのだが、ソプラノは何と高い変口の音をffで歌ったのである。その後の歌唱指導で、この実習生は最

後のクライマックスの迫力だけにこだわり、生徒達を励ましながらかこの部分を少なくとも7～8回歌わせたのであった。ソプラノが歌った高い変口音は声楽専攻の大学生にとっても相当高度な発声訓練を必要とする音域なのである。まして中学生が喉から絞り出すような発声で無理矢理出すのであるから、声の響きというより「悲鳴」と言っても良いであろう。この練習で5回目を越えた頃には、疲れて音程が保てない状態になっていた。おそらく大多数の生徒は声帯が赤く腫れて相当喉が痛かったはずであるが、それでも頑張って歌っていたのである。

授業の後の反省会で筆者が実習生にこのことを指摘したところ、「一生懸命のあまり、今日はやり過ぎてしまった。今後はこのことに十分注意して指導に当たりたい」とかなり反省しているようであった。

生徒達の演奏は終始「怒鳴り声」で歌っていたため、「美しい声の響き」や「美しいハーモニー」は全く聞くことが出来なかった。このような難曲こそ教師の指導力を発揮出来る良い機会だったはずである。教師が最後のたった1音だけにこだわらず、発声法の基本や音楽的なフレーズの作り方などに目を向けていたら、もっと楽しめる演奏を聞くことが出来たはずである。

### ◎提言 8

#### <生徒の歌唱力を越えた難曲を、課題曲として与えてはならない>

前述の曲はおそらく訓練された合唱団にとっても相当難しいのではないかと思われる。楽譜には最後のソプラノの高音はト音で書かれており、変口の音は括弧( )で書いてあるのでト音で十分だったはずである。教師は合唱コンクールに出場する中学生に対して、超高音に挑戦させることなどは絶対にしてはいけないことである。前にも述べたが、「生徒は自分がどういふ声を出しているのか全くわからない」のである。もし生徒が「高い声は喉に力を入れて絞り出すもの」と思い込んだとしたら、それこそ教師の取り返しのない過ちであり、音楽教師として失格であると思う。

## IV 校内合唱コンクールについて

前項で校内合唱コンクールについて少し触れたが、現在、多くの学校でこれを実施して音楽の面のみならず、生徒指導等その他の面でも成果をあげているということである。筆者は幾つかの中学校から校内

合唱コンクールの審査員を依頼されたことがあるが、現場に臨んで生徒達の演奏を聞き、先生方からお話を伺った経験から筆者が得たことをここで述べてみたいと思う。

### ○ 合唱コンクールの長所

- ①人に対する思いやりの気持ちが出てきて友人関係が円滑に運ぶようになり、クラス全体の結束が強くなる。
- ②目的意識をはっきり持つことで、自分自身の存在感を自覚できる。
- ③仲間と供に作りあげる合唱の楽しさ、歌う喜びを実感できる。

### ○ 合唱コンクールの短所

- ①歌うことに興味がない生徒にとっては、強制的に歌わされるので楽しさを感じることが出来ない。
  - ②歌いたい気持ちはあっても声が出にくいので、仲間と一緒に大きな声で歌うことが苦痛である。
- 校内合唱コンクールは、ある意味では音楽教師の歌唱指導の力が外部の評価として問われる時である。生徒の方はクラスの威信をかけて熱心に取り組むので、教師もそれに応えるべく熱心に指導し、大きな成果をあげているのである。しかしその中には短所②の場合のような、教師が常に注意深く生徒の様子を観察していないと発見出来ない問題が潜んでいるのである。教師はこのような問題に対する配慮も忘れてはならないのである。

## V 結び

最近ではメディアが益々発達し、いつでも、どこでも手軽に音楽を楽しめるようになってきた。日常生活で人の集まる場所には、どこからともなく音楽が流れてきて、我々は現在、実に様々なジャンルの音楽に囲まれて生活しているといっても良いであろう。しかし「音楽を聞きたいか否か」の意志に拘わらず、メディアによって勝手に音楽が流れて耳に入ってくるのであるから困ったものである。このような環境の中で育った子供達は当然、音に対して鈍感になってしまい、「音に集中して聞く」必要がなくなるのである。子供達にとっては、学校の授業で歌う歌も、この種の音楽と同様に感じているのではないであろうか？

一方、学校の教科書で習う音楽にも様々なジャンルの音楽があるが、前者との大きな相違点は、「音

に集中して聞き、歌う必要がある」という点であろう。そして、そのことに自らの労力を費やし、努力した結果、「美しい音楽に触れた感動」を味わうことが出来るのである。このことを知らない子供達に、「自らの意志を持って聞く音楽の美しさ」、「自ら

の意志で歌い、作り上げる音楽の素晴らしさ」を伝えるのが音楽教師の役割であり、教師の役目であるはずである。そしてこのことがどんなに困難であろうとも、教師は自分の信念に基づいて音楽教育に当たるべきであると考えます。